



新橋小学校

学校だより

令和5年9月29日
令和5年度 第6号

オンガク

校長 西尾 琢郎

本校には今年度、新しく音楽専科の渡邊くみ子先生が着任しました。またこの春、長かった新型コロナ対策のあり方が変わったことで、本校のよき伝統である音楽朝会も、ようやく元の姿を取り戻しました。子どもたちが生き生きと歌い、奏で、それに聴き入っている姿を見ると、あたたかなものが胸にこみ上げてくるのを感じます。今年度の音楽朝会は、6月に2年生、7月に5年生、そして9月には1年生がそれぞれ演奏を終え、素晴らしい音楽を聴かせてくれました。

私は音楽がとても好きです。残念ながら楽器は演奏できませんが（これからでも挑戦できたらなあという思いはあります）、声を上げて歌うと、心も体も活力に満ちてくるのを感じます。

私は中学、高校で合唱部に所属していたのですが、その時、ずっと感じていたことがあります。それは、歌うことの難しさ、もっと言えば、歌うための技術を学んだり教えたりすることの難しさです。発声練習では、よく「もっと喉を開いて」とか「お腹から息を出して」とか「頭の後ろから声を出すつもりで」などと言ったりします。

そのどれもが感覚的な話で、実際に喉の中を見せながら説明できるわけではありませんし、息は決して肺以外から出し入れできません。頭の後ろに口が開いているわけでもないことは言うまでもないでしょう。先生に教わる立場だったときにはただのモヤモヤだったものが、学生指揮者や部長という立場になって後輩に指導をするようになって、改めてその難しさを実感しました。そしてよく「運動部の人たちはいいなあ。目に見える形でフォームのお手本を示せるし、文字通り“手取り足取り”指導ができるもんなあ」などと思ったものです。

今、学校では、「知識を注入」し、それを覚え、必要に応じて再現する力を付けるといった指導が中心だった時代から、自ら問いを発見する力や、他者と力を合わせて課題解決に取り組む力といった、目に見えにくく、数値化することの難しい「非認知能力」を育むことを重んじる方向へと、大きな変化のときを迎えています。先生たち一人ひとりが、おそらくは高校時代の私にも似た悩みを抱えながら、日々の授業に取り組んでいるのではないかと思います。

自分自身も受けたことのない新しい授業を作っていくのは、本当に難しいことです。そんな中でも大切なことは、私はやはり「楽しさ」ではないかと思うのです。難しくても、明確な答えがなくても、私が歌い続けていたのは、そこに音楽の楽しさというものを感じていたからでした。

音楽にももちろん得手不得手があって、中には、それを苦手に思っている子がいます。しかしそれでもなお、楽曲に触れることは、ほとんどすべての子にとって、癒やしや快感につながるものではないかと思います。それはつまり、子どもが苦手に感じているのは「音楽という教科」であって、音楽という体験そのものではないということです。体育でも、図工でも、あるいはその他すべての教科においてもそうなのかもしれません。テストが嫌いな子どもはいても、クイズが嫌いな子どもは決して多くないということは、子どもたちが知らなかったことを知ったり、分からないことを考えたりすることがどれほど好きかの証明でもあるのです。

歌うのも、奏でるのも、聴き入るのも音楽。子どもたちが「学ぶ」というときに、その関わり方を一つに決めてかかってしまうことで、たくさんの可能性が失われているかもしれません。そんな見方を大切にしながら、これからも新しい授業づくり、学校づくりを続けていきます。

なかなか完全には終息しない感染症とにらめっこしつつ、今後も音楽朝会は続きます。お子さんが発表される機会には、ぜひ学校へお越しになって、子どもたちが生き生きと歌い、奏で、それに聴き入っている姿をご覧くださいと思います。